

別紙

## 岐阜農林事務所の普及活動状況 令和5年3月27日現在

### 今月の重点活動

#### ■指導農業士・青年農業士 合同研修会の開催

岐阜地域指導農業士、青年農業士連絡協議会合同の研修会が、3月3日にOKBふれあい会館で開催された。農業経営の規模拡大にはパートや従業員雇用が伴い、経営者には人材育成の手法や労務環境の整備等が求められるため、人材育成をテーマに研修会を開催した。

まず、深谷経営研究所所長から「従業員の『やる気』が経営を発展させる」と題して講演があり、従業員の仕事の成果は「能力×やる気」で決まり、経営者には特にやる気を高めるための心がまえ、行動が必要になるとお話しいただいた。

次に、高山市の元指導農業士である（有）橋場農園会長から、自身が規模拡大に伴い進めてきた従業員教育や労働環境の整備等を、就農時から今までを振り返る形で話をしていただいた。

講師の今後の人材育成はこうあるべきというお話、まさにそれを実践している農業者のお話が一致したことから、非常に印象深い良い内容の研修会となった。

（園芸産地支援第一係・小森 志保、園芸産地支援第二係・菊井 裕人）



【研修会の様子】

### 安心で身近な「ぎふの食」づくり

#### ■岐阜市水田農業担い手協議会 有機質資材の活用について情報提供

岐阜市水田農業担い手協議会総会が、3月22日にJAぎふアグリパークにおいて開催された。議事終了後、みどりの食料システム戦略に関連した研修会が実施され、農林事務所から「有機質資材を活用した施肥・土づくり」と題して情報提供を行った。肥料費が急激に高騰している昨今の現状を踏まえ、生産者の関心は高く、堆肥など有機質資材の活用を真剣に検討している農家の少しでも参考になればと、具体的事例や令和4年度実証結果を踏まえて説明を行った。農家からは有機質資材の購入先など具体的な質問が出されるなど高い関心が寄せられた。

（地域支援第一係・高橋 宏基）



【総会の様子】

#### ■麦大豆 管内の3農業法人が岐阜県麦作共励会及び豆類経営改善共励会にて表彰される

令和4年度「岐阜県麦作共励会」「岐阜県豆類経営改善共励会」の表彰式が3月15日に岐阜県JA会館において開催された。管内からは、麦作共励会で本巣市のアグリフレンドホリグチ（株）が優秀賞を、岐阜市の（農）下城田寺営農が優良賞を受賞した。また、豆類経営改善共励会では岐阜市の（有）三輪北農産が優秀賞を受賞した。農林事務所では、これらの法人に対し栽培指導を行うと共に、共励会出品調書の作成や現地審査の対応を行ってきた。令和4年産の麦大豆は長雨など異常気象により栽培管理の難しい年であったが、各法人とも排水対策や土づくりに注力すると共に気象変動に応じた肥培管理を行う事で、地域平均を大きく上回る単収・品質を得ることができた。それぞれの法人では今回の受賞を契機として麦大豆に対する生産意欲が高まっており、令和5年作に向けて更なる生産拡大が期待されている。

今後、農林事務所は3法人の栽培事例をモデルとして、他の生産者の単収・品質向上に向けた指導を継続していく。

（地域支援第三係・松本 政行）



【受賞した3法人】

## ぎふ農畜水産物のブランド展開

### ■岐阜市だいこん部会協議会 「緑肥研修会」を開催

岐阜市だいこん部会協議会は、現在、グリーンな栽培体系への転換サポート事業（国補）を活用し、大麦を用いたリビングマルチ技術の普及に取り組んでいる。作物栽培中に作物以外の別の植物を同時に生育させる「リビングマルチ」は、雑草抑制効果による除草剤の使用回数削減とともに、緑肥作物のすき込みによる土づくりの効果など様々なメリットがあり、岐阜農林事務所はこの取り組みについて支援を行っている。

3月24日には、JAぎふ則武支店において、この取り組みで助言指導をいただいている農研機構中日本農業研究センターの研究員を講師に迎え、リビングマルチ技術の基礎技術となる「緑肥技術」の研修会をリモートで開催した。

研修会では、緑肥の様々な効果の説明を受け、生産者が実際に取り組む中で生じた疑問等を質問した。また、緑肥から派生し「土壌有用菌」や植物を鋤き込むことにより病害虫の発生を抑制する「バイオヒューミゲーション技術」などについても質問されるなど、大いに盛り上がった。

(園芸産地支援第一係・砂川 匡)



【研修会の様子】

### ■いちご イチゴ原種苗の検査

県育成品種「濃姫」、「美濃娘」及び「華かがり」の増殖用苗は、原原種苗生産施設、原種苗生産施設、各地域の親苗生産施設の順に生産が行われ、生産者の元へ配布される。3月14日には、岐阜県園芸特産振興会いちご部会役員、県関係機関の担当職員が本巣市の原種苗生産施設において、原種苗の配布前の検査を実施した。栄養繁殖で苗生産を行うイチゴにおいては、各施設で優良な苗を生産して農家に届ける大きな責任がある。

農林事務所では、関係機関と連携して原種苗生産施設、親苗生産施設での栽培指導を行っており、今後も優良種苗の安定生産に向けた支援を継続していく。

(園芸産地支援第二係・菊井 裕人、若原 浩司)



【原種苗検査の様子】

## 中山間地域を守り育てる対策

### ■やまがたエゴマ協議会 今年度の成果を検討

やまがたエゴマ協議会が、3月8日に山県市大桑公民館において、今年度の取組成果や次年度の活動計画について協議を行い、農林事務所も出席した。この協議会はグリーンな栽培体系への転換サポート事業（国補）の採択を受け、鶏糞堆肥を使用しながら機械化一貫体系によるエゴマの大規模作付けに取り組んでおり、農林事務所も同協議会のメンバーとして事業計画の検討やエゴマの栽培指導、現地調査などを行ってきた。

当日は農林事務所の他、栽培管理を行う（農）おおが、共同研究を行っているベンチャー企業、山県市、JAぎふ、農機メーカーなど10名が出席し、各機関が今年度得たデータを持ち寄り成果を検討した。その結果、エゴマの播種から収穫に至る一連の作業を農業機械で対応できることが確認されると共に鶏糞堆肥の適正施肥量を導き出すことができた。令和5年には小麦跡地へのエゴマ作付けや直播栽培が計画されており、農林事務所も栽培指導や現地調査を通じて、栽培マニュアルの策定を支援していく。

(地域支援第三係・松本 政行)



【エゴマ協議会の様子】